



# 隈府小だより

学校教育目標「自ら考え なかまと高め合う 隈府小」

隈府小学校  
学校だより No39  
文責 芹川博文  
2月20日(金)

## 「本物」に触れる大切さ

～ 「よだかの星」朗読と ハープとフルートの調べ ～

一瞬にして多目的室が、「音楽ホール」になりました。ハープ奏者（多田 友里恵 様）、フルート奏者（糸岡 久美子 様）、読み聞かせ（荒木 徹代 様）による「昼休み 読み聞かせ会」には、100名以上の児童が集まり、その美しい調べと、朗読された「よだかの星」（宮沢 賢治 作）に耳を傾けました。



私自身、ハープという楽器を間近で見て聞くのは初めてでした。多くの子どもにとっても「初めての出会い」だったのでは。見るからにエレガントな楽器でした。

「少し難しいかもしれないけど、卒業の時期だから」と、選ばれた一冊「よだかの星」の奥深いストーリーと、ハープとフルートの「生音」が、空気の振動となってすっぽり包み込む感覚を味わいました。

「読み聞かせ」と「音楽」、どちらにも共通するもの、それは、「人が生み出すもの」かと思えます。最近では生成 AI による自動音声や音楽も増えてきました。しかし、例えばニュースで「自動音声」に切り替わったとたん、肉声との違いを感じます。また、人による演奏でもスクリーン越しと対面では、その研ぎ澄まされた「空気感」が全く違って来るから不思議です。

これから先、ますます人が生み出す生演奏の良さが再認識される時代になるかもしれません。

## モノづくりの大切さ ～ ミシンの学習から感じたこと ～

今週は連日ボランティアの方々に来ていただき、5年生のミシンの授業が行われました。数名の児童に「これまで使ったことがありますか」と聞いたところ、全て「初めてです」との返答。改めてミシンを使う機会はどれくらいあるのかと思いました。

そう言えば、実家にはミシンがありました。足踏み式のミシンが畳の部屋の隅に。母親が、農作業を終えた夕飯（「晩ご飯」と言っていました）の後や、雨の日、雑巾や服の補正などカタカタと縫っていました。新しく買うより、節約してリメイクする時代、つまりモノづくりが生活の中に息づいていた時代でした。父親も家財の修理や簡単な机、牛小屋の柵などは手作りでした。私は、と言うと、修理をあきらめ新しく買い替える生活に反省します。



ミシンの授業から、モノづくりの価値を再認識した時間でした。

## 「ICT 教育」が「IT 教育」でない訳 ～ コミュニケーションの大切さ ～

学校には ICT 支援員の方が、必要に応じて来校され、タブレットのトラブル解決や、授業の中でサポートをいただいています。まさに「お助けマン」的存在です。

先日、校長室のパソコンを使いやすくしていただいた後、「わざわざ来ていただき、ありがとうございます。今後 ICT 教育が進めば、ますます現場に出向くことが増え、忙しくなりますね。」と言ったところ、「そこで生まれる対話を大切にしています。IT：インフォメーション（情報）とテクノロジー（技術）の I と T の間に、C：コミュニケーション（対話）があるのが、ICT 教育ですから」との言葉が返ってきました。

感動すると同時に、反省しました。自分が苦手だからと、デジタル機器を、どこか「冷たいもの」「人間性を消すもの」と決めつけていたのではないかと。少なくともこの ICT 支援員さんは、現場を駆け回りながら、対話を通して人と人とが繋がることを大事にして汗を流されていることが伝わりました。



そう言えば、これまでお世話になったパソコンが得意な方々も、自分の仕事の手を止めて親切丁寧に教えてくださいました。その温かさも思い出しました。